

調 査・研 修 報 告 書（会派個人用）

会派名：未来のたね

報告者：前田智永

実施場所：広島県立叡智学園	実施日：令和8年1月22日(木)
■目的・課題・問題事項（調査・研修に先立っての思いや本市の現状 など） 広島県がグローバル教育の先端として叡智学園の設立をして6年。設立当初のこどもたちが卒業を迎え、県内のみならず、県外や国外からも入学希望者が殺到しており、学校の魅力化に対して県教育委員会をはじめ、大崎上島町、町民の皆さんのご尽力による成果があるとする。本市においても、人口減少は全国的な課題であり、これからの将来を見据えた学校の魅力化や市政、市民の協力を得て、学校の在り方を考えていく時期にあると考える。こうしたことから、島の叡智学園の取り組みを調査することとした。	
■参考とすべき事項 広島県教育委員会主体ということで、設立当初の建物に係る財源、運行事業費等、有益な財源で初動を取れたことは最大のメリットであったと考える。学校のデザイン、建設一切を株式会社シーラカンスタンドアソシエイツに委託し、デザイン性にも富んでいる。 中学生各学年30人ずつ、高校生各学年60人ずつの300人弱の中高一貫校であり、「人材をどのように育てていくか」というプロセスを大切に学校教育に取り組んでいる。教員は、寮のスタッフを含めて70名程度おられる。 進路先としては、海外の大学進学、国内の大学進学が半々であった。こどもたちが自分の力で自分の将来の夢や目標を見つけ、進路先を自己決定している。学校としてアドバイスをすれば、男女問わずどのような職業にも就けること、特に女性社会参画の視点や、広島県にある学校として平和ミッションの視点を伝えている。 学校教育では日本語と英語で選択して授業を受けられるクラス分けがされており、全体で英語で行われる授業や、日本語で茶道を習う授業もある。入学に際し、指定のパソコンを自己負担で購入すること以外はおおむね他の県立学校と同等もしくは低めの教育費負担。しかし、全寮制ということで、月6万円程度の寮費が必要。寮のスタッフは地元の方に全面協力頂き、委託事業として常駐2名体制で運営してもらっている。長期休業中は、ほとんどの生徒が帰省するが、海外などで帰省出来ない生徒は町内の民泊などを利用してもらっている。 島の方々がとても協力的で、授業のティーチャーになったり、部活の指導やイベント協力もしている。学校ではボランティア、地域活動を生徒個人がいくつも行わないといけなというミッションがあり、カフェ巡りをして看板を制作したり、島内3高校との繋がりであったり、英語で地域運動会をしたり、様々なイベント開催をして案内表示を英語でしたり、通訳の活動なども地域の方に自分で協力依頼して、やっている。時には、地域の方から溝掃除やトマト収穫の手伝いをお願いされて協力することもある。 一番のメリットは国内外のこどもたちが、寮と学校の中で生活することで、世界が自然と広がっているということ。先生もこどもたちもとても楽しそうだったのが印象的だった。一番大変なのは中学生から学校に隣接する寮生活で、トラブルや困りごと先生が関わるところと、授業に使用する教科書が英語なので、一般の学校から異動で配置された教員が工夫を凝らして自分で日本語訳しながら授業をすすめるなど、先生もこどもも授業	

に対する準備などが通常より負担が大きいと感じた。

■提言・その他（本市の施策等にどのように活用すべきか など）

こどもたちの指導体制確保のために、豊富な教員数の確保がされている。県教委の配置基準、市教委の配置基準をこどもの人数ありきではなく、適正な配置がされるべき。人材不足とはいえ、叡智学園のように地域の方に協力して授業を行ってもらう取り組みは本市でも行われている。さらに、悩みを相談したり、常にそこに居てくれて、応援してくれる「人」の存在はこどもたちにとっては大きく、教員に対しても相談体制やカウンセリング時間を設け、学校と地域が一体となっている体制づくりが素晴らしいと考える。

こどもたちも教員も、学校が「行きたい場所」「挑戦できる場所」「自分らしく居られる場所」であるために、学校内外の「スペース」「人」の在り方を研究し、変えていくべきだと感じた。

※調査・研修終了後、一週間以内に会派事務局へ提出してください。